

1911年

菅田 忠志

いまだに納豆と読書は苦手な方だ。おそらくこのあと一生変わることはないだろう。

納豆に関しては、他国の人が不思議がるのと同じ感覚で「どうしてこんな腐ったようなものが食べられるのか」と思ってしまう。

読書の方は、女房から「わたしは読むのは好きやけど、書くのは苦手や。お父さんはなんでもすぐに書いてくれるけど、読むのはハウツーもの専門やね」とよく言われた。

そう言えば、女房は時間がないと言いながらも、本といい新聞といいよく読んでいる。大きな書棚にたくさんの本も持っている。それに比べわたしの書棚は机の上にある2段の小さなもので、そこには何冊かの専門書の他は、趣味のものばかりが並んでいる。

まるで知識や情報源の質の差を指摘されるようで、この話も最近はどうも苦手だ。

たしかに、たくさん本を読んでいる人は、いい書籍とも出会えるだろうし、作品に感動することも多いだろう。残念ながら、わたしにはそのような出会いの書籍は思いあたらない。

先日、高校時代の仲間10数名と、小旅行をやった。このときに立ち寄った、西国第25番霊場「清水寺」で、思わず足が止まってしまったところがある。

本堂の壁に掛けられた、何枚かの羅漢さんの説法言葉。どれも「うーん」とうなずくほか言葉が出てこない。

「人に親切にするとうつことはなあ…」とか「思いやる心とうつものは…」などのほか、「生きるとは…」「わが子を育てるとは…」など、さりげなく掛けられた色紙の言葉には、人として歩むべき道への、しつかりとした道しるべとなる言葉ばかりで、一枚一枚からずっしりとした重みが伝わってきた。

中でもわたしの心にひびいたあの言葉は、残された人生の限りある時間を過ごす上で、常に自問してゆかなければならない言葉となってしまった。

